



# 近代文学研究叢書

## 第七卷

昭和32年12月5日 印刷  
昭和32年12月10日 発行  
昭和47年11月15日 二刷出版

[ ¥ 2 5 0 0 ]

| 著者            | 発行者                   | 印刷者                        | 発行所                                                            |
|---------------|-----------------------|----------------------------|----------------------------------------------------------------|
| 昭和女子大学近代文学研究室 | 小林寅次<br>東京都世田谷区太子堂一〇七 | 梶原忠幸<br>東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地 | 昭和女子大学近代文化研究所<br>東京都世田谷区太子堂一〇七<br>振替口座東京一七〇八六七<br>電話(四二)五一三一八番 |

# 近代文学研究叢書

## 第 七 卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

|        |       |        |        |       |       |       |        |       |       |       |        |       |        |        |       |       |        |       |
|--------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|--------|-------|-------|--------|-------|
| 本      | 保     | 人      | 成      | 内     | 辻     | 玉     | 島      | 山     | 笹     | 坂     | 木      | 金     | 片      | 太      | 荻     | 上     | 石      | 池     |
| 問      | 坂     | 見      | 瀬      | 藤     | 村     | 井     | 田      | 宮     | 澤     | 本     | 侯      | 子     | 桐      | 田      | 原     | 井     | 森      | 田     |
| 久      | 圓     | 正      |        |       |       | 幸     | 謹      |       | 美     | 五     |        | 健     | 顯      | 三      | 井     | 磯     | 延      | 龜     |
| 雄      | 都     | 古      | 勝      | 濯     | 鑑     | 助     | 二      | 允     | 明     | 郎     | 修      | 二     | 智      | 郎      | 水     | 吉     | 男      | 鑑     |
| (近代文学) | (国文学) | (近代文学) | (近代文学) | (仏文学) | (英文学) | (国文学) | (比較文学) | (英文学) | (独文学) | (英文学) | (和歌文学) | (英文学) | (和歌文学) | (比較文学) | (俳文学) | (英語学) | (児童文学) | (国文学) |

# 尾崎紅葉 (1)

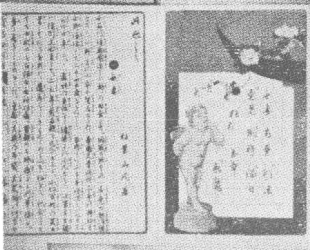
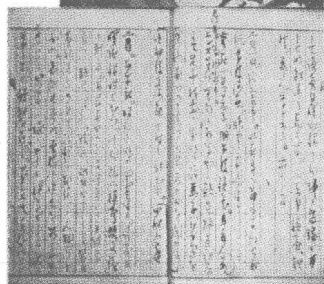
「俠黑兎」——明治二十六年六月刊（昭和女子大学蔵）

「病床画帖」——明治二十六年七月二十六日・二十七日之分（尾崎家蔵）

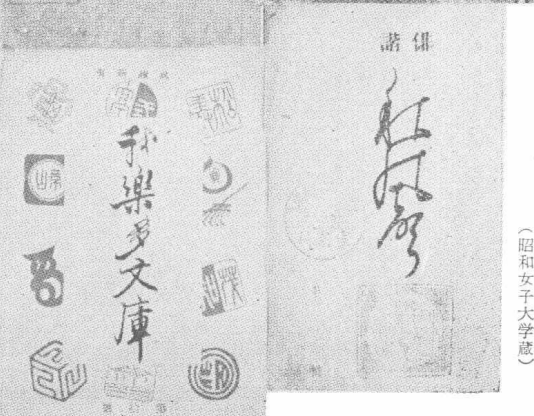


明治三十三年五月上野公園茶亭で左から紅葉、丸岡樋口、岡田

「十千萬堂日録」草稿——明治三十五年三月一日二日之分（尾崎家蔵）



新作十二番第二「此ぬし」——明治二十三年九月刊 表紙と本文初頁（昭和女子大学蔵）



「秋の声」創刊号——明治二十九年十一月刊（昭和女子大学蔵）

「我楽多文庫」第十号——明治二十一年十月刊複製五百部の内（昭和女子大学蔵）

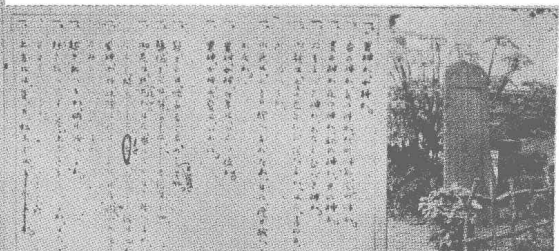
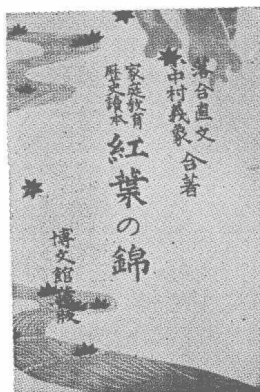


# 落 合 直 文

「紅葉の錦」一明治三十年  
十月刊（昭和女子大学蔵）

「詩神像」原稿  
（毛呂清春氏蔵）

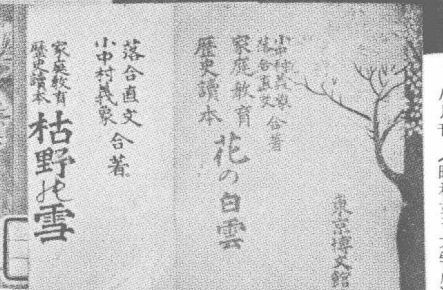
萩寺の歌碑—江東区  
亀戸三丁目所在



「落合直文集」—明治三十  
六年刊—と所載の直文肖像  
（昭和女子大学蔵）



「萩之家歌集」—明治三十  
九年六月刊  
（昭和女子大学蔵）



「花の白雲」—明治三十年  
八月刊（昭和女子大学蔵）

上左・新詩会編「この花」—明治三十年三月刊

右・「新撰歌典」—明治二十四年十一月刊

下左・「萩之家遺稿」—明治三十七年五月刊

右・「驛馬旅行」—明治二十六年七月刊  
（昭和女子大学蔵）

「枯野の雪」—明治三十  
年十月刊  
（昭和女子大学蔵）

「かくれんぼ」：明治二十四年七月刊  
(昭和女子大学蔵)

緑雨筆跡（本間久雄氏蔵）

[illegible]

齊以驥錄雨著

みたれ箱

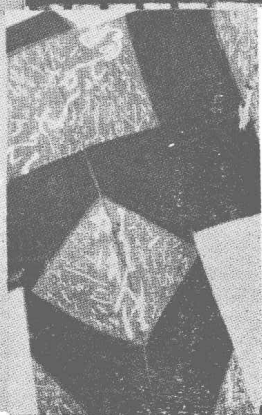
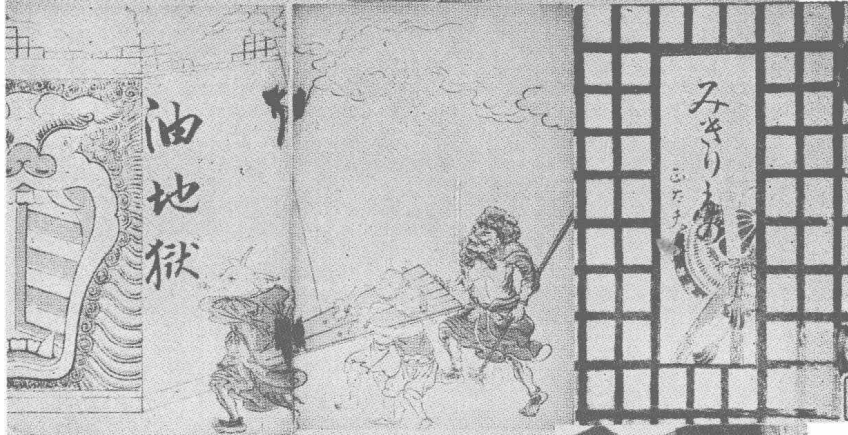
東京  
博文館藏版

阿米蛙

「みだれ箱」—明治三十六年  
五月刊（昭和女子大学蔵）

綠雨肖像  
「明星」明治三十七年  
五月所載

綠雨生家  
三重県鈴鹿市神戸  
町所在



# 小 泉 八 雲 (2)

上がハーンで、下がミチエル・マ  
グダナルド (小泉一雄氏蔵)

「みゆーぜあむ」第十八号—明治三十四  
年十月刊—ハーンの前置詞についての特  
別寄稿がついている (昭和女子大学蔵)

「雲の日本」—1899年刊。ハーンは  
これを「梅の本」と呼んでいた。  
(小泉一雄氏蔵)



「影」—一九〇〇年刊 ハーンはこれを「蓮の本」と呼んでいた

(小泉一雄氏蔵)

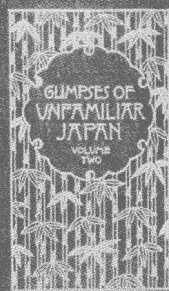
「帝國文學」第十卷第十一号—明治三十七年十一月刊  
小泉八雲記念号 (昭和女子大学蔵)

新宿区役所にある八雲の除籍簿 その右は「異国情趣と回顧」—一八九  
八年刊 ハーンはこれを「へちまの本」と呼んでいた (小泉一雄氏蔵)

「新小説」第十一年第十卷—明治三十九年十月刊  
は同誌の内ヶ崎作三郎「在米時代の小泉八雲先生」  
(昭和女子大学蔵)

八 雲・紅 葉・直 文

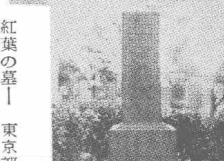
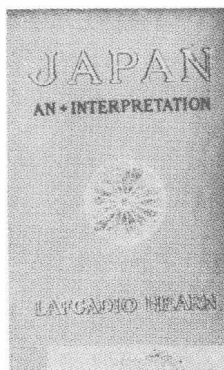
「知られぬ日本の面影」下巻—日本での第一著—  
一八九四年刊 (小泉一雄氏蔵)



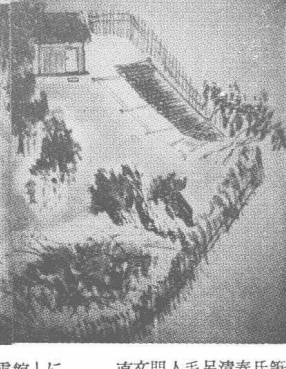
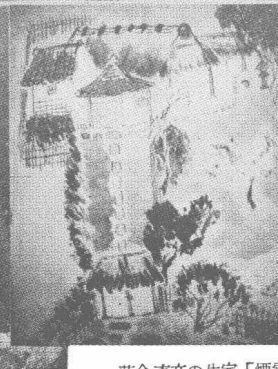
「帝国文学」第四卷第一号—明治三十一年一月刊  
ハインの *Avant Psychology* がのびている (昭和女子大学蔵)

帝國文學

第四卷 第一号



紅葉の墓—東京都、青山墓地



← 落合直文の生家「煙雲館」に  
ある歌碑—宮城県気仙沼市

直文門人毛呂清春氏筆の直文宅図

「神国日本」—一九〇四年刊  
中の上はハインの描いた絵 (小泉一雄氏蔵) その下は「日本雑  
録」—一九〇一年刊—中のハイン自筆の原稿 (天理大学蔵)

紅葉の「やまと昭君」のまじ絵 (昭和女子大学蔵)

## 森田思軒宛の手紙

抱一庵肖像、右上は「新小説一九  
十号」明治三十七年十月「所載のま  
しえ。」（昭和女子大学蔵）  
左下は「新小説」第二卷「明  
治三十年二月」所載の写真  
（昭和女子大学蔵）



福島県信夫山共同墓地にある墓、抱一庵もここに葬られている。左は福島における旧居の跡（北町二十六番地跡）で今は「日産花壇」の標札がある緑地帯である。

「拿破崙」一明治二十五年十月刊  
(昭和女子大学蔵)

「小説泰西奇文」一明治  
三十六年九月刊  
(昭和女子大学蔵)

上「聖人が盗賊か」下編——明治三十六年五月刊、表紙と扉、下はその上編——明治三十六年三月刊、表紙と初頁（昭和女子大学蔵）

# 小 泉 八 雲 (1)

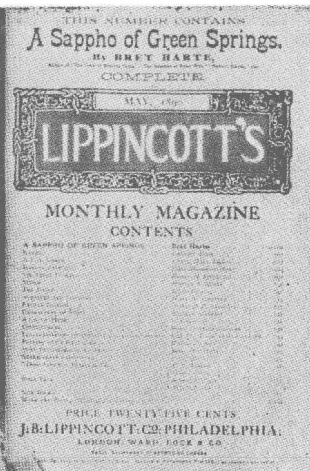
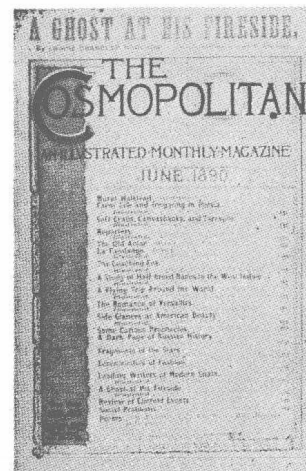
「コスモポリタン」誌—1890年6月号—  
「西インド諸島の混血族」所載（天理大学蔵）

「リッピンコット」誌—1890年5月号—  
「カーマー」がのっている（天理大学蔵）

## 八 雲 肖 像

講義用メモの内容の一部  
（天理大学蔵）

明治二十三年ハーンがアメリカからもつてきたインク壺とペン軸  
（小泉一雄氏蔵）



講義用メモの表紙（左中の写真参照）  
明治三十一年七月から三年間東大におけるハーンの講義を栗原基氏が筆記したものを八冊にまとめた複製したもの（栗原基氏蔵）

三十代のセツ夫人  
（小泉一雄氏蔵）

「支那怪談」—1887年刊  
（小泉一雄氏蔵）

# 目次

|   |        |                      |
|---|--------|----------------------|
| 口 | 第七卷の成立 | 昭和女子大学 近代文学研究室……(一三) |
| 凡 | 例      | 昭和女子大学 編 集 室……(一六)   |
| 尾 | 崎 紅 葉  | ……(一九)               |
| 落 | 合 直 文  | ……(一九)               |
| 齋 | 藤 緑 雨  | ……(二七)               |
| 原 | 抱 一 庵  | ……(三七)               |
| 小 | 泉 八 雲  | ……(三三)               |

## 第七卷の成立

本巻は明治三十六年十月から三十七年九月の間に歿した左記五名の調査研究を収めた。

尾崎紅葉は、文芸上の主義、思潮を超えて明治の文豪としていつまでも日本人の魂に若々しい息吹きをあたえている。戯作者風の出発であつたにもかかわらず、身を以て近代への蟬脱を作品の展開で示した点と、人間的に伝統日本人の良さを多分に持ち、同人門弟に対しては統率者としてのおおらかな人がらを示し、優秀な弟子を近代に送り込んだところに人間紅葉への親近と信頼を感じしめるものがある。明治十八年山田美妙等と硯友社を起し「我楽多文庫」つづいて「文庫」を出したことは、まさに日本の新しい文学の曙光にも似ていた。二十二年新著百種に発表の「二人比丘尼色懺悔」がその出世作となつて以来、「多情多恨」、「金色夜叉」等多くの名篇大作を世に送った。庶民的な倫理や感覚で市井風俗を描く中にも、西鶴の写実的筆法をとり入れ、逍遙の小説神髓の刺激を受け、或は翻案小説なども試み、次第に心理解剖や性格描写へと進んだ。多くの可能性を包蔵したままわずか三十七歳で歿したのであつた。門人に小栗風葉、柳川春葉、泉鏡花、徳田秋聲などがあり、明治以後三代の文運は彼の擁した同人門人の間から興つたと云つても過言ではあるまい。風俗小説といひ、紅葉山脈といひ、彼の文学態度、小説技法は現代に継承され、日本文学の一つの支柱となっている。

落合直文は古典の集大成とその啓蒙普及に学者、教育者としての大きい業績を残している。明治二十三年小

中村義象、萩野由之等と日本文学全書二十四巻を刊行したことは、旱天の慈雨にも似た喜びと知識を国文学徒にもたらし、爾来わが古典のオーソドックスな研究書目としてはすべてこれに準拠すると云うことになった。

三十一年には十カ年の苦心の結晶になる国語辞書「ことばの泉」十三万語の大冊が出版され、百科全書的国語辞書として広い読書層に便益を与え、語法、言語に対する国民の関心をも高めた。彼は更に文学者としての功績に著しいものがある。明治二十一年長詩「孝女白菊の歌」を東洋学会雑誌に発表、あまねく人口に膾炙するところとなり、二十二年森鷗外等の文学運動に共鳴し新声社同人として「しがらみ草紙」刊行にも協力し、「於母影」に訳詩「笛の音」を掲載、いち早く新体詩に関心をよせた。二十六年わが国新派和歌の淵藪「浅香社」を設立して和歌改良の先鞭をつけ、多くの子弟を導き実践へと進んだ。過激をきらい、穏健、折衷の漸進主義をとったが、その門弟鐵幹、靈園、柴舟に至って結実し、その門流は種々形をかえて現歌壇に繁栄している。

齋藤緑雨は伊勢に生まれ少年時代に上京、其角堂永機や假名垣魯文に教えを受けた。この江戸戯作文学の教養がその資質と相まって終生彼の文学活動に制約を与えた。明治十九年今日新聞に小説としての処女作「善悪押絵羽子板」を掲載、二十四年「油地獄」、「かくれんぼ」などを発表して小説家として認められたが、彼の本領は諷刺的な評論随筆にあり、すでに明治二十二、三年頃読売新聞に発表した「小説八宗」、「初学小説心得」、「小説評註問答」等により辛辣な批評家として知られた。二十九年、鷗外、露伴と「めざまし草」の「三人冗語」、「雲中語」の合評に加わり、三十一年万朝報に「眼前口頭」を掲載していずれも特異の才筆で読者を魅了した。この頃随筆小説集「あられ酒」を刊行したがその中の「おぼえ帳」、「ひかへ帳」などの随筆は彼の独擅

場たる透徹皮肉な戲評と輕妙洒落な文章の珠玉篇で埋められている。三十二年新聞を退いて後は、貧窮生活を送りつつ、肺患療養のため諸所に転地、三十七年四月不遇のうちに三十七歳で歿した。最後の江戸っ子文士として戯作者態度に終始したが一面新しい文学を理解する識見もあり、「文学界」の新人や、樋口一葉などとも親しかった。

原抱一庵は岩代郡山の人、少年時代は政治家を理想とした。上海の亜細亜学館、札幌農学校等に学び、特に札幌では語学、文学を身につけ、その特殊の学風は彼の人間形成にも役だった。明治二十一年森田思軒の翻訳「炭坑記事」を読んで感激し、卓越した批評を思軒に書き送ったことが機縁となって、二十二年同氏を頼り上京、その推薦で報知新聞記者となった。二十三年、政治的伝記小説「闇中政治家」を同紙に連載し、ただちに一流文人に列した。思軒に従って報知新聞退社後は次第に逆境に向かい、東京日日新聞、万朝報等にも関係したが永続せず、殊に思軒歿後は生活も乱れた。三十三年東京朝日新聞に翻訳「聖人か盜賊か」を掲載、再び文名を高めたが、頽廢と憂悶の生活はその恵まれた天分をのばすことなく、遂に狂疾を發し、三十七年八月巢鴨の病院でわずか三十八歳で歿した。彼の英語読解力と文章の流麗は思軒以上とも言われ、前記のほか、「巴黎の秘密」、「月珠」、「白衣婦人」、「哀史」等の翻訳がある。

小泉八雲、帰化前はラフカディオ・ハーンと云い、一九五〇年ギリシャのリュカディアに生まれた。家庭的不遇のうちにダブリンの大伯母のもとで少年時代をすごした。左眼の失明もこの頃である。この間フランスの学校でも学び欧州文学の知識を得た。一八六九年独立生活をもとめて渡米、苦難のうちに各地を放浪、新聞記

者となり、後ニュー・オーリアンズのタイムズ・デモクラットの文学部主筆としてすぐれた記事を書き、又多くの西欧文学を紹介した。翻訳「クレオパトラの一夜」、「シルヴェストル・ボナールの罪」を始め西印度諸島に取材した「チタ」、「ユーマ」等の作品は彼の文名を高からしめた。在米二十年の後、ハーバー書店の派遣で、明治二十三年四月、来日、八月松江中学の英語教師になった。神の国出雲の信仰と習俗、古風で落ちついた城下町の生活等は、彼の生涯中最も幸福な時期であった。十二月松江藩士の娘小泉セツと結婚、翌年十一月熊本第五高等中学校に転任、三年の後二十七年神戸に移り神戸クロニクルの記者となり、「知られぬ日本の面影」、「東の国から」、「心」等日本に関する名著を続々出版した。この時代に日本に帰化し、出雲に因んで小泉八雲と改名した。二十九年九月から六年余にわたり、東京帝国大学で英文学を講義した。彼の講義は甚だ精彩に富み、西欧文学の紹介と批判、英国近代詩の評釈等によって、近代文学の精髓をわかり易く、学生に理解させた。この間も執筆を続け「仏土の落穂」、「骨董」、「怪談」、「神国日本」等を世に出した。そして初期の旅行記風のものから次第に瞑想的なものへと進んだ。三十七年四月から早稲田大学で教鞭を執り、同年九月二十一日狭心症のため西大久保の自邸で急逝した。日本の古伝説、怪談に取材した幻想的、抒情的作品は今なお多くの読者に親しまれている。